

平和について

成瀬中学校3年 癸生川 姫海

私は、お兄ちゃんとお姉ちゃんのことを誇りに思っています。なぜなら、私の知らない世界を教えてくれるからです。兄たちは、私が小さい頃からブランコや読書、ケンカの仕方まで教えてくれました。たくさん家族で旅行にも行きました。今まで十以上の都道府県を巡ったことがありますが、その中で一番、印象に残っている場所は沖縄です。

その時に「ひめゆりの塔」「旧海軍司令部壕」に参拝をしました。まだ幼かったせいか、ただただ怖かった、というのが私の本当の気持ちです。しかし、あれから何年か経ち「きけ、わだつみの声」という戦争に関する映画を観ました。そして戦争というものが、どれだけ悲惨なものであるかを知りました。何十人もの兵士が手榴弾のピンを抜き、自決するというシーンがありました。私がひめゆりの塔へ参拝しに行った時も、約十人の少女らが手榴弾を使って、自ら命を絶ったという話を聞きました。通学途中で友達と話している時に空襲に遭い、そのまま家に帰ることが出来なかった女の子。お母さんが作ってくれたお弁当を食べることなく、丸こげで見つかったお弁当箱。見ているだけで息苦しくなりました。

そして、きっと優しくかった兵士も飢えや睡眠不足、栄養失調などから心を失っていきました。心を失うという事は同時に仲間や自分を裏切り、傷付けました。同じ目標で一緒に戦ってきたはずの仲間を殺めてしまう事もあったそうです。大切な人たちの死を目の前で見て、終わりがくる事はないのではないか、という毎日を生きてきたのだと思います。私は、戦争とは人や物などの大切な物をなくすだけでなく、人の考え方や人格までも変えてしまうんだと思いました。改めて戦争とは、狂気なものだと感じました。それでも前を向いて一生懸命に生きている人たちを見て、現実的に日本で起こったことなんだと思うと悲しくなったり、悔しくなったり、今の自分を見て恥じたりすることがあります。

ひめゆり学徒隊は、十二歳から負傷者を看護していました。負傷者といっても、私の想像を絶するものでした。両足がとれて運ばれてくる兵士。目が見えなくなってしまう兵士。顎がとれてウジが湧いてしまっている兵士。もう亡くなると分かっている、励ましながらお水を飲ませていました。食料運搬では、同期である友達がお米を取りに行き、銃撃を受けてしまい、帰ってこなかった事もあったそうです。私は今、十四歳ですが戦いの中で人を助けに行くことができるのでしょうか。私は人の為に何が出来るのかと自問自答してしまいます。

だから私は、お兄ちゃんとお姉ちゃんのことを誇りに思います。二人は、自衛官です。兄は部隊で他の国から船などが侵入してきた時に、レーダーで距離を測り、日本を守るという勉強をしています。姉は車が損傷した時に、早急に直すという訓練をしています。今まで自衛官の方たちは、戦うための訓練をしているのだと漠然と考えていましたが、自衛官は攻撃から日本を守ってくれるという事を兄と姉の話から知りました。ニュースで、他の国の争いを観ることがあります。家族を亡くして泣き叫ぶ子供。負傷して立ち上がれない老人。「他国のこと」とは片づけることは出来ずに不安な気持ちになります。他国の戦争に日本が加担しなければいけない日が来ないことを私はいつも祈ります。そして、日本が戦争しないことを祈ります。